

「新幹線ほくとう連携研究会 函館フォーラム」 開催報告

平成27年11月5日(木)函館市において新幹線ほくとう連携研究会・函館商工会議所主催の「新幹線ほくとう連携研究会 函館フォーラム」が開催されました。

本研究会は東北活性研に加え、ほくとう総研、はまなす財団、青森地域社会研究所の4地域シンクタンクの共同研究事業として一昨年11月から実施しております。これまで4回の研究会を通じ、3月の北海道新幹線の開業に伴って期待される北海道・東北地域の更なる広域的交流・連携促進の可能性について、経済、生活、文化など様々な視点から研究を行ってまいりました。

今回の函館フォーラムでは、これまでの研究成果として、参加メンバーの中から高橋功・北海道二十一世紀総合研究所主席研究員、河村和徳・東北大学大学院准教授、當瀬規嗣・札幌医科大学教授、片石温美・室蘭工業大学准教授

と座長を務める石井吉春北海道大学大学院教授の計5名による研究発表を行いました。

まず高橋主席研究員から、「北海道新幹線開業による効果と課題」と題し、北海道新幹線の投資効果に関する報告がなされました。こうした投資効果の算定は前提条件の変化によって大きくも小さくもなるため、さらに新幹線の効果を高めるために一層の取組みが必要であると訴えました。



【高橋主席研究員の発表内容】

次に河村准教授から「北陸新幹線の開業効果と北海道新幹線への示唆」というテーマで、昨年3月に開業した北陸新幹線が地域に与えた影響や効果などを踏まえ、北海道新幹線の開業沿線地域はどのような考えで行動していけばよいのかについて報告がなされました。

當瀬教授は「医療分野における広域連携の可能性」と題し報告を行いました。生活習慣病の増加や医師の専門化などの医療をめぐる構造変化により、通院の遠距離化や医師不足が深刻に



【会場風景】



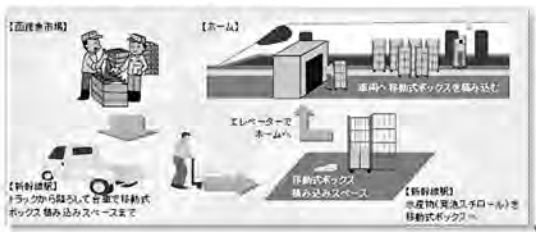
【研究発表を行う當瀬教授】

なっていることを踏まえ、新幹線を単に旅客を移動する手段としてみるのではなく、医療資材の運搬や救急輸送にも活用する提案がなされました。

片石准教授は「新幹線を利用した新たな荷物輸送」と題して、道南地域の水産物の新幹線を利用した首都圏への直接輸送を提案しました。これにより、鮮度向上による単価の向上が図られるとともに、新たな水産物の需要を喚起することも可能であると述べました。

函館魚市場を出発点とした新幹線輸送システム例

- 車両内部を改造して移動式ボックスを積込む
- 荷物積載のための大がかりな施設不要
- 1両に10トン積載可能



【片石准教授の発表内容】

最後に座長の石井教授が「北海道新幹線による新たな広域交流の可能性と課題」と題し、2次交通の整備の充実を訴えると共に、青函トンネ

ルを新幹線と在来線（貨物列車）が共同で利用することによる新幹線の減速問題（いわゆる「青函共用走行問題」）に触れ、条件を整備することで人の動きが変わり、通勤・通学利用等にも使われるようになって、さらなる交流が拡大することが期待できると述べました。

研究発表後のパネルディスカッションでは、北海道新幹線で旅客以外を輸送するという當瀬教授と片石准教授の提案を踏まえ、世界的規模で色々な変化が起きている現代においては、「新幹線は旅客を運ぶもの」という着工当時から続く固定観念を捨てて、貴重なインフラをフル活用することが出来るよう取り組むべきであるという意見が出されておりました。

開業まで140日余りに迫る中、会場には多くの聴衆が足を運び、各研究内容の報告に熱心に耳を傾けていたほか、現地のテレビニュースや新聞で大きく報道されるなど関心の高さが感じられました。

東北活性研では「高速交通網の発達による中枢都市仙台の変化と新たな役割」というテーマで、高速交通網の整備に伴う仙台の中枢都市としての成長と人々の交流拠点としての成長について、都市イベントに注目して報告を行っております。

研究会参加メンバー13名による研究成果をまとめた報告書は、近く発行の予定となっております。